

活動報告

Activity Report

アート・リサーチセンター研究活動報告 ——2015年度 プロジェクト研究

日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点

2015年度 研究拠点形成支援プログラム 研究プロジェクト報告書

- ① メタバースを活用した文化資源の仮想展示とアーカイビングプロジェクト
- ② 京都における伝統産業資料の保存と活用
- ③ 京都の歴史GIS
- ④ アジア圏文化資源研究開拓

文部科学省 共同利用・共同研究拠点 立命館大学アート・リサーチセンター

日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点 2015年度 共同研究成果報告書

A. テーマ設定型

- ① 京都盆地を対象にした文化資源デジタル・コンテンツの利活用と流通を促進するプラットフォーム構築
- ② 海外日本美術品・工芸品のデジタル・アーカイブとコレクション研究

B. 個別テーマ型

- ① デジタル・アーカイブ手法を用いた近代染織資料の整理と活用
- ② 浮世絵データベースシステムを応用した浮世絵の新研究
- ③ 近代京都の市街地の形成と建築様式・用途との関連性に関する研究
- ④ 近世近代期京都の地誌・案内記を対象としたデジタルアトラスの構築
- ⑤ 東南アジアの舞踊のドキュメンテーションとデジタル・アーカイブ研究
- ⑥ 浮世絵技法の復元的研究のための光計測・画像解析基盤技術の創出
- ⑦ 演劇上演記録のデータ・ベース化と活用、ならびに汎用利用システム構築に関する研究
- ⑧ 富本憲吉とバーナード・リーチ往復書簡の研究ー京都市立芸術大学所蔵資料を中心に
- ⑨ Archiving and Utilization of Japanese Performing Arts Materials on GloPAD and JPARC
- ⑩ 中世語彙画像対照データベースの構築に関する基礎研究

メタバースを活用した文化資源の仮想展示とアーカイビングプロジェクト

代表：細井浩一（映像学部 教授）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

稲葉光行（立命館大学政策科学部 教授）
 Ruck Thawonmas（立命館大学情報理工学部 教授）
 北原 聡（立命館大学映像学部 教授）
 八重樫文（立命館大学経営学部 教授）
 金子貴昭（立命館大学衣笠総合研究機構 准教授）
 山本真紗子（日本学術振興会 特別研究員）
 石上阿希（国際日本文化研究センター 特任助教）
 加茂瑞穂（立命館大学衣笠総合研究機構 PD）

【研究計画の概要】

アート・リサーチセンターにおける過年度の諸研究プロジェクト（グローバルCOE、科研費基盤研究、私大戦略的研究基盤形成事業、研究拠点形成支援など）において構築してきた研究用メタバース（インターネット上の三次元仮想空間）は、すでに下記の仮想展示、仮想環境を有した日本の文化資源に関する本格的な仮想展示および協調学習のための空間として評価を得ている。

- ・「能舞台および能舞モーション」体験施設
- ・「加賀お国染めミュージアム」
- ・「伊勢型紙美術館」
- ・「京都『型友禅』ミュージアム」
- ・「仮想展示～春画を見る、艶本を読む」

本申請においては、これらの諸展示、学習空間の既存成果を踏まえつつ、①アート・リサーチセンターにおける日本文化資源研究の成果を新たに仮想空間において公開、発信していくこと、②既存の仮想空間展示についても追加的なリニューアルを行い、研究成果のアップデートと継続的な公開、発信を追求すること、③日本文化についての協調学習環境の改良を行い、既存展示の内容、趣旨と連動させた学習プログラムを開発すること、をサブテーマとしたプロジェクト型研究を実施する。とりわけ、メタバースの特性を活用した日本文化資源研究展示による成果発信とその学習促進に関する実践的な課題解決を主要なイシューとしつつ、あわせて、メタバースを一種のデジタルアーカイビングの環境として位置づけ、アーカイバルサイエンスを含めたデジタルアーカイブの諸研究、諸実践の観点から、その可能性と

課題についても新たな研究課題とする。

【研究成果の概要】

研究計画に従い、サブテーマ①から③について研究を進捗させた。

①については、今年度は新規テーマの開発を実施せず、既存テーマのアップデートとリニューアルに専念することとした。

②については、「メタバース展示運営者ミーティング」を実施し、それぞれの展示内容のアップデート、リニューアルについて日常的に意見交換を実施した。「仮想展示～春画を見る、艶本を読む」については、2015年9月～12月に開催された「春画 日本美術の性とたのしみ展」（永青文庫）にあわせて実空間-仮想空間のハイブリッド展示を企画し、仮想空間内に「仮想空間内トランスポート」と「実展示URLによるウェブ案内」を同時に実装した案内看板を設置した（図1左）。また、永青文庫展示と並行して実施された『銀座「春画」展』（永井画廊）に協力し、同展示において「仮想展示～春画を見る、艶本を読む」を常設展示するとともに、両展示の監修を務めた共同研究者の石上氏によるギャラリー・トークを実施した（図1右）。



図1：実空間-仮想空間ハイブリッド案内看板（左端）と永井画廊における仮想展示解説

③については、本拠点において仮想空間展示として整備している日本文化資源の属性が衣装あるいは衣類デザインに関わるものが多いことを踏まえて、当該の研究資源の社会化（ビジネスを含む社会的応用）の一つの可能性として、服飾あるいは服飾史を研究教育するユーザー用の仮想レクチャー環境（図2）、および、レクチャー内容と相関する衣装へのアバターの簡易着替環境（図3）を設計、仮実装した。また、既存展示の内容、趣旨と連動させた学習プログラムについて、上田安子服

飾専門学校および株式会社毎日映画社との共同研究を開始し、服飾史（ファッションとその流行の歴史）を学ぶための映像コンテンツを含むカリキュラム開発を進めた。



図2：仮想レクチャー空間の基本設計



図3：アバターの簡易着替環境の基本設計

【研究成果（著書・論文・学会発表・その他）】

〈著書（分担執筆）〉

細井浩一「～日本のデジタルゲームを浮世絵の二の舞にしないために～ゲームアーカイブ・プロジェクト（GAP）の取り組み」角川アスキー総合研究所編『ゲームってなんでもおもしろい?』KADOKAWA, pp.134-135, 2016年3月

〈論文〉

Mitsuyuki Inaba, Michiru Tamai, Kenji Kitamura, Ruck Thawonmas, Koichi Hosoi, Akinori Nakamura, and Masayuki Uemura, 'Constructing Collaborative Serious Games for Cross-Cultural Learning in a 3D Metaverse', *Proceedings of Replaying Japan Again: 3rd International Japan Game Studies Conference 2015*, Ritsumeikan University, Kyoto Japan, pp.84-85, 21-23 May 2015

〈その他〉

《Web展示（協力）》

細井浩一『銀座「春画」展 Ginza Shunga』石上阿希監修, 銀座永井画廊, 2016年9月20日～12月23日

《学会賞》

細井浩一「日本デジタルゲーム学会賞」日本デジタルゲーム学会, 2016年2月28日

《招聘講演》

細井浩一「日本・石川県文化創意産業発展与新的地域振興模式」『中日文化創意産業与地域創新国際學術研討会』, 大連工業大学（中国）, 2015年9月22日

《外部資金》

科学研究費補助金・基盤研究（B）一般・H27～H31「メタバースを用いた日本の伝統文化及び生活文化の状況学習支援環境に関する総合的研究」（代表・稲葉光行, 2015-2019年）採択

京都における伝統産業資料の保存と活用

代表：木立雅朗（文学部 教授）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

鈴木桂子（立命館大学衣笠総合研究機構 教授）
吉田満梨（立命館大学経営学部 准教授）
山本真紗子（日本学術振興会 特別研究員）
加茂瑞穂（立命館大学衣笠総合研究機構 PD）
高須奈都子（立命館大学衣笠総合研究機構 客員協力研究員）
山口欧志（立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員）

【研究計画の概要】

本研究では染織資料を中心とした伝統産業資料群を学術研究の俎上に上げるとともに、それらの研究成果を日本文化理解や経済活動へと還元し、有機的に循環するよう実践的に取り組むものである。

申請者等は、「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」（「京都における工芸文化の総合的研究」2010年度～2014年度）を通じ、京都の伝統工芸に関する現状調査や異分野とのコラボレーションをおこなってきた。なかでも伊藤若冲の絵画を活用した新たな着物を制作し、友禅染の各工程を動画や聞き取り調査により記録した。加えて、完成した着物や制作工程に関する展示会を開催し、現代における伝統工芸の在り方を提示した（展覧会「分業から協業へー大学が、若冲と京の伝統を未来に繋げるー」2014年7月、京都文化博物館、国際シンポジウム「つたえる力2工芸研究とデジタル・ヒューマニティーズ」2015年2月、国際シンポジウム「つたえる力3京都の土と石ー伝統工芸を支える資源ー」2015年3月）。また、京都市内の染織関連資料の多くが、近代染織産業の様相を語る重要な資料でありながら学術資料として未確認・未整理のままであることから、デジタル技術を駆使し、資料の保存や研究基盤形成に取り組み、成果の一つとして着物を生産するために使用された“もの”をデータベース化して立命館ARCから公開し、近代染織資料の調査と共有化をはかってきた。こうした活動により、散逸・廃棄を免れ、歴史的価値付けが成された資料群も存在するが、全体として伝統産業資料群の危機的状況は現在も急速に進行している。このような状況を鑑み、本研究では、これまでのデジタル・アーカイブ化の活動を継続し、染織資料群の保存・共有化という急務にあたる。

一方、伝統産業資料の保存活動ならびに多様なデー

タベースによる資料の共有化はしても、その研究成果が十分に社会還元されてこなかった面も否定できない。そこで、本研究では現代の染織業界に精通した新たなメンバーを加え、伝統産業資料群のデジタル・アーカイブの有機的な連携とその活用や人的ネットワークの強化とともに、資料の特性を踏まえた日本文化理解や経済活動へと展開する実践的な活動を進める。とりわけ本研究の共同研究者は、これまで二次データと流通事業者への聞き取り調査に基づき、産業としての縮小をもたらした問題構造の特定（『立命館経営学』第52巻第2・3号）ならびに消費者調査にもとづくユーザー視点での染織工芸品の価値定義と潜在顧客となりうるユーザーグループの存在を提示した。本研究では、流通事業者に対するさらなる聞き取り調査と伝統産業資料群の共有を推進し、経済活動としての発展可能性の検討を視野に入れる。

こうした活動により、伝統産業資料の保存と活用とが有機的に循環する研究活動となり、地域産業のイノベーションをも創出や社会還元の循環による「京都らしい」地域密着型の実践的研究となる。

【研究成果の概要】

伝統産業資料群の危機的状況に応じて、デジタル・アーカイブ化の活動を継続した。以前から使用していたデジタルカメラを更新したことによって、図案を使用した型彫りの状況を立体的に観察することができるようになった。図案の文様を鉄筆状の道具でなぞった様子や型彫りと同時に切り抜いた状況などを詳細に観察することができるようになった。

さらに、新たな染織資料群の保存・収集活動を行った。特に、京都市内で近年廃業したまま多くの資料を保存していた型友禅工房「坂口友禅」の工房の調査を行った点は特筆される。工房の略測量を行い、所有していた賞状・古写真のデジタル写真撮影を行った。それに加えて、図案、膨大な量の型紙、型彫出控、裂帳など、型友禅に関わる多様な資料を収集することができた。また、工房空間の動画・静止写真による記録を行い、「坂口友禅工房」空間を追体験できるようなヴァーチャル・ウォーキングツアーを作成するための記録化をあわせて行った。従来、染織関係の資料群は図案・絵摺り・型紙が中心であったが、型彫出控や裂帳など、作

業に関わる詳細な記録を入手できたことは大きな成果であった。そのほか、手描き友禅の草稿も収集している。

従来、染織関係の資料を収集する場合、作品、もしくは図案類が中心であり、今回収集した草稿や型彫出控などのように、製作に直接関わる生の資料は十分に注目されてこなかった。そうした意味で、今回収集することができた資料は独特の資料として、今後注目されるだろう。それはこの資料群を将来活用するためにも欠か

せないものである。特に型彫出控という、従来あまり知られていなかった資料は、型染の実践的技術を詳細に記録しており、注目される。

こうした収集とは別に、友禅図案データベースを活用し、唐紙板木、シルクスクリーン型への応用も模索し、それに関わる染工場の調査を行った。これによって次年度以降、友禅図案を活用した作品作りを実現する見込みを立てることができた。

【研究成果（著書・論文・学会発表・その他）】

〈論文〉

木立雅朗「京都の戦争遺跡—家庭用防空壕と伝統産業—」文化財保存全国協議会『明日への文化財』, 74, 2016年1月
帖地真穂・木立雅朗「京都における戦争遺跡の調査と活用」菊池 実・菊池誠一編『季刊考古学 別冊 アジアの戦争遺跡と活用』雄山閣, 23, 2015年8月7日

山本真紗子「近代着物研究発展の可能性—メトロポリタン美術館の特別展」民族藝術学会『民族藝術』, 32, 2016年3月
〈研究発表（国外）〉

Mizuho Kamo, 'Examining Digital Archiving Strategies of Katagami through the Prism of a Private Kyoto Collection', *International Symposium: Katagami in the West* 『海外での「型紙」の姿』, University of Zurich, 18 March 2016

Keiko Suzuki, 'Kyoto's Textile-printing Industry and Digitalization', *Japanese Cultural Assets and Digitalization*, Unterlinden Museum, France, 29 March 2016

Keiko Suzuki, 'Present-day Katagami in Kyoto's Textile-printing Industry', *International Symposium: Katagami in the West* 『海外での「型紙」の姿』, University of Zurich, 18 March 2016

Masako Yamamoto, 「京都・型友禅の現状—立命館大学の京友禅プロジェクトからみえてきたもの」*International Symposium: Katagami in the West* 『海外での「型紙」の姿』, University of Zurich, 18 March 2016

【査読有】Mari Yoshida, 'Product Rejuvenation by Co-Creating Value with Customers: Case Studies of Declining Industries in Japan', *2015 Korean Scholars of Marketing Science International Conference*, Yonsei University, Korea, 14 November 2015

〈研究発表（国内）〉

加茂瑞穂「友禅協会の図案募集」「近代京都の美術・工芸に関する総合的研究—制作・流通・鑑賞の視点から—」基盤研究(B) 平成27年度～30年度(代表: 並木誠士) 研究会, 京都工芸繊維大学美術工芸資料館, 2016年2月27日

【査読有】山本真紗子「伝統産業における分業の功罪—立命館大学京友禅着物プロジェクトを通して—」第57回意匠学会大会, 武庫川女子大学甲子園会館, 2015年7月26日

吉田満梨「『間』から考える和装と社会」第30回服装社会学研究部会, 文化学園大学, 2016年2月20日

〈その他〉

《パネル発表》

山本真紗子「立命館大学アート・リサーチセンター所蔵白地立命館R紋意匠伊藤若冲《雪芦鴛鴦図》模様手描友禅染訪問着、白地立命館R紋意匠伊藤若冲《葡萄図》模様型友禅染着尺」, 第57回意匠学会大会, 武庫川女子大学甲子園会館, 2015年7月25日・26日

《ワークショップ》

研究課題「デジタル・アーカイブ手法を用いた近代染織資料の整理と活用」『ARC Week 2015』, 立命館大学アート・リサーチセンター, 2015年7月28日

《Web展示》

木立雅朗「赤膚焼元窯」・山本真紗子「和鏡」「京友禅(手描き友禅)」「京友禅(型友禅)」「花かんざし」「京つげ櫛」「西陣織」『Google Cultural Institute: <https://www.google.com/culturalinstitute/beta/>』, 2016年1月26日～

《外部資金》

京都産学公連携機構「文理融合・文系産学連携促進事業」・京都産学公連携機構助成金「糊流し染『マドレー染』の復活における記録と希少染色技法を活かした新たなものづくりの可能性と事業化について」(代表・鈴木桂子, 2015年7月～2016年6月) 採択

京都の歴史GIS

代表：矢野桂司（文学部 教授）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

片平博文（立命館大学文学部 教授）
 吉越昭久（立命館大学文学部 特任教授）
 中谷友樹（立命館大学文学部 教授）
 加藤政洋（立命館大学文学部 准教授）
 三枝暁子（立命館大学文学部 准教授）
 金田章裕（立命館大学衣笠総合研究機構 特別招聘教員）
 赤石直美（立命館大学歴史都市防災研究所 客員研究員）
 谷端 郷（立命館大学文学研究科 博士課程後期課程）
 谷崎友紀（立命館大学文学研究科 博士課程後期課程）
 前田一馬（立命館大学文学研究科 博士課程後期課程）
 佐藤弘隆（立命館大学文学研究科 博士課程後期課程）
 今村 聡（立命館大学文学研究科 博士課程後期課程）
 村上晴人（立命館大学文学研究科 研究員）
 高木良枝（立命館大学衣笠総合研究機構 客員協力研究員）
 河原 大（立命館大学衣笠総合研究機構 客員協力研究員）

【研究計画の概要】

アート・リサーチセンターでは、これまで最先端のGIS技術を用いて歴史GISに関する研究を展開してきた。そこでは、京都を中心に平安時代から現代までのGISデータベースを構築し、歴史都市京都の地理的分析に関する研究を実施してきた。本プロジェクトでは、これまでに培ってきた歴史GIS研究（『バーチャル京都』・『京都の歴史GIS』など）の成果を活用しつつ、新しい地理空間情報のコンテンツを対象とした歴史GIS研究を展開することにある。

その中では、これまでデジタル化されていない、歴史都市京都の地理空間情報を「バーチャル京都」に取り込んで公開するとともに、従来アート・リサーチセンターの歴史GISプロジェクトにおいて研究が希薄であった中世都市、近・現代の花街とその周辺地域、庭園に関する新しい研究課題に取り組むに継続的に実施する。また、歴史都市防災研究所と連携しながら、平安期から近代までの歴史災害に関する地理空間情報もバーチャル京都に取り込む。

特に、昨年度中に完成できなかった地理空間情報のデジタル化、GIS化を継続するとともに、新たに追加した「京都市明細図（原図）」（長谷川家住宅所蔵）の活用

などを検討する。

これらの研究の遂行にあたっては、昨年度から、日本史学分野から中・近世都市史を専門とする三枝、近・現代の都市地理学を専門とする加藤の両先生に引き続き参加いただき、歴史都市防災研究所からは、吉越、片平先生らの協力を要請する。また、文化情報学専修から佐藤氏、今村氏、地理学専修から谷端氏、谷崎氏、研究生（京都市嘱託職員）の村上氏、客員研究員の高木氏、河原氏などの若手にも参画いただく。

【研究成果の概要】

本研究課題では、京都の歴史GISの新たな展開として、主に以下の3つの研究を中心に実施した。

1. バーチャル京都の拡張

（矢野、中谷、片平、吉越、金田、赤石（河角）、谷端、村上、佐藤、前田、河原）

1) 近代京都の地理空間情報のうち、仮製図、正式図、都市計画図（大正11年、昭和4年、10年、28年）、京都市明細図（京都府立総合資料館、長谷川家住宅）のWebGISである『近代京都オーバーレイマップ』をGoogleMaps APIを活用して公開した。（<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/ModernKyoto/>）

また、京都アスニーの平安京創生館と連携して、『平安京オーバーレイマップ』を公開した。（<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/heian/>）

2) 京都学専攻に旧竹松家所蔵から寄贈された、1950年代～90年代の京都新聞・朝日新聞・毎日新聞・読売新聞等に掲載された福知山市・長岡京市等に関する歴史・地理に関する記事をまとめたスクラップ帳の目録をエクセルデータに入力した。今後は、このデータの新聞記事をPDF化し、GIS上からも検索できるシステムを構築する計画である。

2. 中世京都の歴史GIS研究

（三枝、矢野、谷崎、村上、今村、佐藤）

15世紀初頭に作成された京都の酒屋名簿の分析を行うために、名簿に記された地点表示をもとに各酒屋の

GIS化を行った。当時の酒屋や金融的な機能も有しており、経済的な中心の空間的分布を明らかにできると期待している。現在、酒屋相互の関係や、地下水脈との関係について分析を進めている。

3. 京都市明細図の活用

(加藤、河角(赤石)、村上、今村、佐藤、高木、矢野)

「京都市明細図」をベースにした戦後の京都の景観復元に資する諸資料を収集するとともに、地理情報に関し

てはデータベース化し、画像資料に関してはデジタル化した。具体的には、『職業別電話番号』と『住宅地図』の各年版を基礎資料として、京都固有の集合建築である〈会館〉の立地展開と経年変化を明らかにするとともに、従前の用途に関して、「京都市明細図」との照合を進めた。今後は、一連の基礎作業を基盤に商業地区(西木屋町・旧花街)の景観を復原する予定である。

また、近代京都の大縮尺の地図を活用して、戦中・戦後の記憶地図の作成を、松原通、明倫学区などで実施した。

【研究成果(著書・論文・学会発表・その他)】

〈論文〉

赤石直美・福島幸宏・矢野桂司「WebGISを用いた戦後京都の記憶のアーカイブとその課題」『地理情報システム学会講演論文集』地理情報システム学会, 25, 4p. (CD-ROM), 2015年10月

加藤政洋「戦後京都における『歓楽街』成立の地理的基盤—花街の変容に着目して—」『立命館文学』645, pp.45-63, 2016年3月

加藤政洋「〈会館〉という迷宮 京都の集合建築に学ぶ都市の奥ゆき」『CEL』, 112, pp.30-35, 2016年3月

矢野桂司「近代京都の歴史GISのための地理空間情報の整備」『立命館文学』, 645, pp.255-273, 2016年3月

〈その他〉

《Web公開》

『近代京都オーバーレイマップ』<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/ModernKyoto/>

『平安京オーバーレイマップ』<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/heian/>

アジア圏文化資源研究開拓

代表：赤間 亮（文学部 教授）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

富田美香（立命館大学映像学部 教授）
 西林孝浩（立命館大学文学部 准教授）
 三須祐介（立命館大学文学部 准教授）
 金子貴昭（立命館大学衣笠総合研究機構 准教授）
 山口欧志（立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員）
 李 増先（立命館大学衣笠総合研究機構 PD）
 前崎信也（京都女子大学家政学部 准教授）
 川内有子（立命館大学文学研究科 博士課程後期課程）

【研究計画の概要】

デジタル環境が浸透する中、文化・芸術研究においてもデジタル・アーカイブの必要性が、増大している。アート・リサーチセンター（ARC）では、設立以来、デジタル・アーカイブを研究活動の根幹に置き、さまざまな先導的な研究成果を残してきたが、とりわけ、欧米の博物館や美術館に散在する日本美術品を対象としたデジタル・アーカイブでは、それが統合されることで、圧倒的な成果を生み出し、文化芸術分野における、海外との研究交流ならびに比較文化研究など、さまざまな研究プロジェクトの底支えとなってきた。

本研究では、これまで欧米を中心に展開してきた上記の研究を、拠点形成支援資金という目的を踏まえ、あらたな研究展開を目指して、文化・芸術の研究のアジア展開を構想するものである。この場合、これまでの研究と次のような相違が出てくる。

1. 欧米に拡散した日本文化財の場合は、工芸・美術品が中心であったが、アジアを対象にする場合は、芸能や民俗資料にも対象を広げる必要がある。
2. 「拡散された資源をデジタル化により、日本美術品や工芸品を集合させる」という方法よりも、同分野での東アジア、東南アジアの文化財との比較が主要な方法となる。

本研究では、「アジアの中の日本文化」という視点による研究テーマを、芸術文化分野で、立上げ、いくつかの対象や分野を横断する形で、研究組織を立上げ、アジア各国との国際的な研究交流相手の発掘や深化による拠点形成を目指すものである。

なお、昨年度の研究活動のなかで、中国や韓国、東南アジアだけでなく、欧米にあるアジア研究所・アジア専門図書館博物館との研究交流プロジェクトも、「アジア

の中の日本文化」を探る上で重要な方法になることが確認されており、この方面での新たな研究プロジェクトの立上げも図りたい。

アジアでのデジタル・アーカイブ展開については、仏教美術・陶磁器に関して中国での来年以降の可能性を踏まえた予備調査、出版文化面では、韓国で日本古典籍や板木アーカイブの交渉、芸能調査では、近代演劇の芸能記録調査、さらには、ビデオやモーションキャプチャなどの情報メディアを活用した記録の動向を探ることも予定しており、昨年度準備期間として予備調査を行った以下の研究テーマについて、本格的に研究交流と蓄積を行っていくものである。

【研究成果の概要】

《仏教美術および考古学分野》

2016年2月13日（土）～2月17日（水）にかけて、中国の考古学界をリードする研究機関であり、近年、河北省の鄴城遺跡の発掘を進めるなどの目覚ましい成果をあげている中国社会科学院考古研究所（以下、考古研究所）から研究者をアート・リサーチセンター（ARC）に招聘し、意見交換など研究交流を行い、ARCで蓄積してきたデジタルアーカイブ技術の中国仏教美術研究への応用方法について検討を行った。研究交流期間中、「アジア出土遺物デジタルアーカイブの可能性」と題した国際ワークショップを開催した。

国際ワークショップにおいては、考古研究所漢唐研究室副研究員・何利群氏から、仏像出土状況の詳細や修復の最新現状についての報告、考古研究所考古科技実験研究中心副主任・劉建国氏から、中国における文化遺産デジタルアーカイブの最先端技術について報告がおこなわれた。また、またARCからは、赤間と金子がARCにおけるデジタルアーカイブ研究成果について報告をおこなった上で、山口がモンゴルのオラン・ヘレム壁画墓および日本の根付に関するデジタルアーカイブ技術について報告、西林が鄴城出土仏像のアーカイブ化に関する課題と図像解釈の問題を提起した。

ワークショップ当日は、関西および関東方面の各大学・美術館・研究機関から、日本美術史、中国美術史、日本考古学、中国考古学、文化遺産学、文化資源学、文化情報学など様々な専門分野の研究者および大学院生の参加をいただき、大盛況のうちに終えることができ

た。また、当該ワークショップが、ARCおよび考古研究所の研究協力進展、そして、活発な研究交流の起爆剤となったことは間違いない。これをうけて、今後も、両機関による研究交流を進め、ARCが所蔵するデジタル機器やデジタルアーカイブ技術を活用した、共同研究の可能性について協議を継続してゆく予定である。

また、モンゴルにおいて考古資料の3次元デジタルアーカイブの実践とその方法の実習型ワークショップを2日間開催した。ワークショップにはモンゴルの文化遺産関係の主要機関である考古学研究所、国立博物館、国立文化遺産センターが参加した。その結果、翌年度以降の継続と、全国の博物館向けのより基礎的なワークショップを開催したいとの強い要望を得た。

《工芸分野》

ボストン・メトロポリタンに次いで日本美術品を多数所蔵するオハイオ州・クリーブランド美術館において、ジム・ホージンガーコレクションの展覧会を2017年度に開催することが決定し、ゲストキュレーターとして参加することが決定した。

《出版文化史分野》

2016年3月28日～3月30日に韓国・古版画博物館（原州市）を訪問し、所蔵板木の予備調査および今後の研究交流の打ち合わせをおこなった。結果、2016年5月開催の原州古版画祭への招聘を受けた他、2016年度中にARC・古版画博物館で研究交流協約を締結すること、2016年度に同館所蔵板木のデジタルアーカイブに着手することが決まり、交流を深化させることができた。また国内では、美術書出版株式会社 芸艸堂、株式会社法蔵館、本山佛光寺の板木デジタルアーカイブ構築を進捗させた他、個人所蔵資料のデジタルアーカイブ構築（京都市1件）と、予備調査（上田市1件）を行った。

【研究成果（著書・論文・学会発表・その他）】

〈著書〉

（翻訳）三須祐介（訳）、胡淑雯『太陽の血は黒い』あるむ、459p、2015年4月

〈論文〉

赤間亮「立命館大学アート・リサーチセンターの古典籍デジタル化：ARC国際モデルについて」『情報の科学と技術』65, pp.181-186, 2015年4月

Shinya Maezaki, 'Naturalism in Meiji-period ceramics: Basin with a crab by Miyagawa Kozan I (1842-1916)', *Andon*, 99, pp.33-41, May 2015

三須祐介「申曲與京劇の影響關係」傅謹（主編）『梅蘭芳與京劇的傳播（上下）第五屆京劇學國際學術研討會論文集』文化藝術出版社, pp.917-926, 2015年5月

山口欧志「白山信仰関連文化遺産の文化資源化と活用」日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集, pp.356-357, 2015年7月

三須祐介「胡淑雯『太陽の血は黒い』試論－『超級大国民』及び『欲望という名の電車』との関連から－」植民地文化研究：資料と分析, 14, pp.197-210, 2015年7月

赤間亮「春画の想像力ー歌舞伎のパロディーー」『春画入門：浮世絵の豊潤なる世界』河出書房新社, pp.75-77, 2015年

《古典籍・版画文化分野》

昨年度に引き続き、東アジアの教育史をテーマとして、公文教育研究会が所蔵する江戸時代の往来物や明治期の国定教科書を中心とする歴史的教科書のデジタルアーカイブを実施した。また、ケンブリッジ大学のロックハートコレクションのデジタルアーカイブ構築を行い、コレクションの全容把握やプロビナンス研究に着手した。これらは、順次ARCの古典籍データベースに登録され、全ページ閲覧・比較可能とした。さらにカリフォルニア大学バークレー校三井コレクションに含まれる銅版画について、昨年度実施できなかった分のデジタルアーカイブ構築をおこない、銅版画閲覧システムを通じて公開した。

《映像分野》

2015年7月22日に、本学衣笠キャンパスにおいて、韓国映像資料院、本学コリア研究センターとの協力関係のもとに、韓国映像資料院が昨年中国で発見した植民地期の映画『授業料』の上映・講演会を開催した。これにより、植民地期の映画文化に関する共同研究ならびに両国共通の映像史についてのアーカイブ活動を推進することができた。

《芸能分野》

国立台北芸術大学演劇学部の東アジア演劇研究会に参加し、今後の連携のありかたについて議論を進めた。また、日本国内に所在する関連資料の所蔵状況について調査を行いつつ、国内外の研究者とも交流を深め、当該分野においてどのような研究資料をデジタル化し、共有するのが共同研究に効果的であるのかについて検討を行った。結果、次年度以降に東アジア圏の演劇研究におけるデジタルヒューマニティーズの可能性をさぐる研究イベントを開催することとなった。

9月

金子貴昭「二〇一五 東亜細亜木版国際学術会議「記録遺産と木板文化」 「日本近世期の板木保存状況と板木デジタルアーカイブによる保存・活用」発表抄録」温故叢誌, 69, pp.52-56, 2015年11月

山口欧志「考古遺物の三次元モデル作成」文化財の壺, 4, pp.8-17, 2016年1月

前崎信也「美術展覧会という外交ー1935年にロンドン王立芸術院で開催された大中国美術展と日本」鹿島美術研究: 年報, 第32号別冊, pp.415-425, 2015年11月

三須祐介(訳)「ためらいの近代ー台湾語映画と近代化のイマジネーション(盧非易著)」濱田麻矢他編『漂泊の叙事ー一九四〇年代東アジアにおける分裂と接触』勉誠出版, pp.433-455, 2015年12月

赤間亮(訳)「北斎とその彫師(エリス・ティニオス著)」『アート・リサーチ』16, pp.39-44, 2016年3月

金子貴昭「書籍の看板」俳文学研究, 65, pp.4-5, 2016年3月

李増先「曲水宴の食事に関する覚え書き」平安文学研究・衣笠編, 第七輯, pp.24-37, 2016年3月

〈学会発表〉

李増先「海外における和刻本漢籍の流通: ケンブリッジ大学図書館の場合」立命館大学日本文学会第144回例会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2015年4月12日

李増先「ケンブリッジ大学図書館の和刻本漢籍」2015年度第1回日本比較文化学会関西支部例会, 同志社大学今出川キャンパス, 2015年10月31日

金子貴昭「板木による板株管理の成立前後」京都俳文学研究会11月例会, 龍谷大学大宮キャンパス, 2015年11月21日

Ryo Akama, 'Introduction of the ARC: Its platform and system to be employed for advanced-level research projects', *International Conference "Towards International Collaboration among Centers for East Asian and Japanese Studies"*, Art Research Center, Ritsumeikan University, 16 January 2016

赤間亮「役者絵は役者の身体をどのように描いてきたか」共同研究「日本の舞台芸術における身体ー死と生、人形と人工体」研究会, 国際日本文化研究センター, 2016年1月23日

李増先、「極東の視座からの和刻本漢籍画像データベースの構想」第5回知識・芸術・文化情報学研究会, 立命館大学大阪梅田キャンパス, 2016年2月6日

金子貴昭「板木観察と出版研究」 「官版日誌類に関する史料学の構築および戊辰戦争期の情報と地域に関する学際的研究」公開研究会(平成27年度), 立命館大学アート・リサーチセンター, 2016年2月11日

赤間亮「共同研究拠点のためのARCポータルデータベース設計ーWEB上の資源を統合したマルチメディア型研究データベースー」アジア圏文化資源研究開拓プロジェクト国際ワークショップーアジア出土遺物デジタルアーカイブの可能性ー, 立命館大学アート・リサーチセンター, 2016年2月14日

金子貴昭「ARCの対象資料特化型データベースとそれらの連携について」アジア圏文化資源研究開拓プロジェクト国際ワークショップーアジア出土遺物デジタルアーカイブの可能性ー, 立命館大学アート・リサーチセンター, 2016年2月14日

西林孝浩「中国鄴城地域の半跏思惟像」アジア圏文化資源研究開拓プロジェクト国際ワークショップーアジア出土遺物デジタルアーカイブの可能性ー, 立命館大学アート・リサーチセンター, 2016年2月14日

山口欧志「文化遺産のデジタル記録とその活用」アジア圏文化資源研究開拓プロジェクト国際ワークショップーアジア出土遺物デジタルアーカイブの可能性ー, 立命館大学アート・リサーチセンター, 2016年2月14日

Ryo Akama, 'An Introduction of ARC digital archive model and the portal database for Japanese cultural heritage', *International Conference "Japanese Cultural Assets and Digitalization"*, Unterlinden Museum, 29 march 2016

〈その他〉

《イベント主催》

『アジア圏文化資源研究開拓プロジェクト国際ワークショップーアジア出土遺物デジタルアーカイブの可能性ー』立命館大学アート・リサーチセンター, 2016年2月14日

《学外研究費採択》

2015年度橋本循記念会研究活動助成「中国仏教美術デジタルアーカイブ化の研究」(代表: 西林孝浩) 採択

《受賞学術賞》

金子貴昭, アート・ドキュメンテーション学会 第9回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞, 2015年6月

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2015年度 共同研究成果報告書

A. テーマ設定型 ①

京都盆地を対象にした文化資源デジタル・コンテンツの 利活用と流通を促進するプラットフォーム構築

研究代表者：奥窪宏太（凸版印刷株式会社 文化事業推進本部）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

矢野桂司（立命館大学文学部 教授）

川嶋将生（立命館大学 名誉教授）

塚本章宏（徳島大学大学院総合科学研究部 准教授）

河角龍典（立命館大学文学部 教授）

河原 大（株式会社キヤドセンター）

矢口浩平（ESRI ジャパン株式会社）

福島幸宏（京都府立総合資料館）

西山 剛（京都府京都文化博物館）

佐伯敬太（凸版印刷株式会社文化事業推進本部文化事業推進部 部長）

加茂竜一（凸版印刷株式会社文化事業推進本部 部長）

中島基道（凸版印刷株式会社 文化事業推進本部文化事業推進部 係長）

【研究課題の概要】

本研究では、これまで様々な機関において作製されてきた京都の有形無形の文化資源デジタルコンテンツを集積させ、それらを流通・活用させるためのプラットフォームを構築することを目的としている。このプラットフォームを通して、様々な文化観賞シーンにおけるユーザ体験を向上させることはもちろん、それによって文化資源のデジタルコンテンツの蓄積がさらに促進されるという、文化資源の宝庫である京都ならではのデジタル・アーカイブ・スパイラル（循環）を創出し、さらにそれらを相互に利用することによって、それらを素材とした新たなデジタルコンテンツの構築を促進させる。

また、そうした文化資源デジタルコンテンツの流通や活用に関する著作権などに関しても検討する。

【研究成果の概要】

4.の構想実現に向けて、これまで個々の目的によって蓄積されてきた既存の文化資源デジタルコンテンツが共通の基盤上で継続的に蓄積されていくこと、ユーザ体験としてコンテンツ品質の高いこと、また、活用に重点を置いた

デジタルコンテンツを共有する仕組みや、その利用に関するコンテンツ・フォルダーやデジタルコンテンツ作製者との権利交渉等、実例を踏まえながら検討していく必要があった。そこで、本年度は「洛中洛外図屏風」を題材にし、構想に対するモデルケース〈「洛中洛外図」WEBプラットフォーム〉の構築に着手した。具体的には、国内外に約180種現存すると言われるこの屏風のデジタルデータ、及びそのメタデータを蓄積し、ユーザビリティの高いWEBプラットフォーム上で共有できるようにするため、「洛中洛外図屏風ポータルサイト」「洛中洛外図屏風の閲覧システム」「洛中洛外図屏風の比較閲覧システム」を試作した。同屏風は2013年に東京国立博物館で開催された「京都ー洛中洛外図と障壁画」や2015年京都文化博物館での「京（みやこ）を描く」の主題となり、鑑賞対象としても研究テーマとしても認知の高まりつつあるのと共に、まさに京都盆地をその被写体とした美術品でもあると共に、地理情報を包有した歴史的資料とも言える。

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2015年度 共同研究成果報告書

A. テーマ設定型 ②

海外日本美術品・工芸品の デジタル・アーカイブとコレクション研究

研究代表者：John Carpenter (メトロポリタン美術館 学芸員)

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

Bincsik Monika (メトロポリタン美術館 日本部門学芸員)

Janice Katz (シカゴ美術館 アソシエート学芸員)

Alice Kraemerová (ナールステク博物館 日本・韓国担当学芸員)

Markéta Hánová (プラハ国立美術館アジア部 主任学芸員)

Hans Thomsen (チューリッヒ大学東洋美術部 教授)

小山 騰 (ケンブリッジ大学図書館日本部門司書)

Andrew Gerstle (ロンドン大学SOAS 教授)

Ellis Tinios (リーズ大学 名誉講師)

Timothy Clark (大英博物館 日本担当主任学芸員)

松葉涼子 (立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員)

Rosina Buckland (スコットランド国立博物館 東アジア担当上級学芸員)

Clare Pollard (オックスフォード大学アッシュモリアン博物館 学芸員)

Annegret Bergmann (ベルリン自由大学美術史学部 准教授)

Cora Würmell (ドレスデン州立磁器美術館 学芸員)

Matthi Forrer (ライデン民族学博物館 主任学芸員)

Ewa Machotoka (ライデン大学地域研究研究所 准教授)

Donatella Filla (キオッソーネ東洋美術館・館長)

Bonaventura Ruperti (ヴェネチア大学日本学科 教授)

Silvia Vesco (ヴェネチア大学アジア・北アフリカ学科 教授)

Sonia Favi (ヴェネチア大学日本学科 助手)

Daan Kok (ライデン大学地域研究研究所 講師)

赤間 亮 (立命館大学文学部 教授)

鈴木桂子 (立命館大学衣笠総合研究機構 教授)

金子貴昭 (立命館大学衣笠総合研究機構 准教授)

前崎信也 (京都女子大学家政学部 准教授)

加茂瑞穂 (立命館大学衣笠総合研究機構 PD)

Orsola Battaglia (ヴェネチア大学 博士前期課程)

川内有子 (立命館大学文学研究科 博士課程後期課程)

Sabine Bradel (チューリッヒ大学リサーチアシスタント、PhD Student)

Sawako Takemura Chang (ライデン大学 地域研究所

Ph.D. candidate)

【研究課題の概要】

欧米各国に散在する日本美術・工芸品をアート・リサーチセンターのデジタル・アーカイブ技術を活用して、デジタル化し、各所蔵機関が共同で利用できる大規模なデータベースを構築する。このデータベースを共同利用しながら、とくに、関連するドキュメント、古典籍をもデジタル化することにより、海外に輸出された美術・工芸品がどのように理解されてきたか、コレクションそのものの総体がどのような性格を持つのか、それらが日本文化理解をどのように深めて来たかを考察する。データベース化により、分野の異なる美術品・工芸品を結びつけ、また、未整理・新収の文化資源についても、継続的にデジタル・アーカイブすることに務める。可能な限り一般公開に結びつけ、この分野の研究環境の高度化を実現する。

【研究成果の概要】

- 今年度も、継続的に分担研究者が所属する研究組織や関係する組織（全12機関）が所蔵する日本美術・工芸品のデジタル・アーカイブを実施した。
- また、デジタル化資料のデータベース化についても、2016年度分は、リートベルグ博物館の古典籍など全8機関を対象として進めた。また、2015年以前分の遡及入力文についても、メトロポリタン美術館バーシ・パウコレクションの他、2機関分を完了させた。
- マレガ文庫を事例にして始まった所蔵機関別のデータベースとしては、コフル東洋美術館など9機関が活用をはじめている。
- 古典籍DBのオンライン編集機能を強化し、国文学研究資料館「古典籍総合目録データベース」の自動検索、類似作品からのメタデータ取り込システムを実装した。
- 古典籍DBをポータルデータベース化し、外部データベースの取り込を実施した。

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2014年度 共同研究成果報告書

B. 個別テーマ型 ①

デジタル・アーカイブ手法を用いた 近代染織資料の整理と活用

研究代表者：青木美保子（京都女子大学 准教授）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

並木誠士（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 教授）

鈴木桂子（立命館大学衣笠総合研究機構 教授）

上田 文（京都工芸繊維大学美術工芸資料館 研究員）

山本真紗子（日本学術振興会 PD）

加茂瑞穂（立命館大学衣笠総合研究機構 PD）

ARC Week 2015 で、ワークショップを開催し、長崎巖氏を招聘し、共立女子大学・長崎巖研究室と合同調査を実施した。

5. 糸・布・衣の循環史研究会との研究交流 糸・布・衣の循環史研究会と合同で、アーカイブ化に向けた大同マルタ関係資料研究会を開催した。

【研究課題の概要】

本研究は、学術資料として俎上に上がっていない近代染織史に関連する資料の整理・蓄積をすすめるものである。近代染織史を研究するための資料は散在し、かつ未整理のものが大半であり、基礎的な資料調査が必要不可欠な段階にある。一方、近代の染織産業については聞き取り調査も研究手法の有効な手段であり、文献資料には残らない情報を収集することができる。そこで、本研究では、近代染織研究に必要な資料整理や調査を進めつつ、資料・情報を蓄積していく場を構築し、情報技術を駆使してその共有化を進める。この資料・情報の整理・蓄積・共有化は、染織研究関係者と染織業従事者へ新たな交流の場を提供することとなり、延いては染織業の活性化を模索する足掛かりとなるであろう。

6. 展覧会および研究成果の報告書
展覧会及び研究成果報告の冊子を発行した。

【研究成果の概要】

1. 染織従業者らへの聞き取り調査と聞き取り記録のデジタル・アーカイブ訪問調査を行い、現在の染織技法や過去の染織産業の状況を音声・動画・静止画により記録した。
2. 公開イベントの開催
展覧会「京都近代捺染産業の軌跡 一ローラー彫刻の祖 武田周次郎とその後一」を開催した。
3. 資料のデータベース化
大同マルタ会旧所蔵資料のデータベース化を進めた。
4. アート・リサーチセンター所蔵の資料調査

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2014年度 共同研究成果報告書

B. 個別テーマ型 ②

浮世絵データベースシステムを応用した浮世絵の新研究

研究代表者：岩切友里子（京立命館大学 客員研究員）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

中村恵美（元都立中央図書館 司書）

John Resig（立命館大学衣笠総合研究機構 客員研究員）

Tim Clark（大英博物館 日本担当主任学芸員）

Angus Lockyer（ロンドン大学SOAS, Lecturer in the History of Japan）

赤間 亮（立命館大学文学部 教授）

松葉涼子（立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員）

Vanessa Tothill（立命館大学文学研究科 博士課程後期課程）

プ、ならびにその基盤データとなるロジャーキーズカタログの公開に向けたデジタル化（PDF/JPG）作業を開始した。

7. ロジャーキーズカタログを元にした、北斎カタログレゾネをARC浮世絵DB上に構築するサンプル入力を行った。

【研究課題の概要】

浮世絵専門のイメージ・データベースとして、世界を代表するものにアート・リサーチセンターの浮世絵データベースとJapanese Woodblock Print Searchがある。データベースシステム開発のキーマン二人と、浮世絵専門研究者による新たな研究データベースを開発する。研究データベースは、カラログレゾネの日常的な蓄積を可能とする応用的な展開を目指すもので、これによって、具体的にはRoger Keyes北斎カタログ（未刊行）のデータベース化を実現し、その上で、大英博物館での北斎展に結びつける。

【研究成果の概要】

1. ARC浮世絵DBがポータルデータベース機能を持ったため、外部の画像公開データベースの取り込を開始した。
2. ARC浮世絵データベース・メタデータ蓄積を大量に蓄積した。
3. 関連データベース・オンライン資料の作成を実施した。
4. ARC浮世絵データベースのシステム改訂を行った
5. ARC浮世絵DBによるカタログレゾネを具体的な事例を作成した。
6. 大英博物館でのLate Hokusai展に向けたワークショップ

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2015年度 共同研究成果報告書

B. 個別テーマ型 ③

近代京都の市街地の形成と 建築様式・用途との関連性に関する研究

研究代表者：大場 修（京都府立大学大学院生命環境科学研究科 教授）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

矢野桂司（立命館大学 教授）

橋本歩美（京都府立大学 大学院生）

河角直美（立命館大学文学部 非常勤講師）

高木良枝（立命館大学 客員研究員）

福島幸宏（京都府立総合資料館庶務課副主査）

上原智子（京都市景観・まちづくりセンター事務局 次長）

辻真紀子（京都市景観・まちづくりセンター事業 第一課長）

宗野ふもと（京都市景観・まちづくりセンター）

高橋 彰（京都市景観・まちづくりセンター）

【研究課題の概要】

全市に及ぶ大きな戦災を免れた京都市には、市内に4万8千棟もの町家が今なお残る¹⁾。しかし現在の市街地は画一的な宅地開発や建築活動が進み、町家の数は確実に減少し続け、地域の特性や景観が失われつつある。

地域の景観形成に資するまちづくりの方針を考える上で、今日の地域が形成された要因を歴史的・建築的に理解することが不可欠であるが、これまで、近代京都の市街地の形成過程と特に建築様式との関係性に焦点をあてた研究は少ない。

本研究は、明治以降、とりわけ三大事業以降の京都の市街地の変遷過程を地域ごとに空間的に把握し、その背景となった社会経済状況、及びそうした社会活動の受け皿としての学区や地域、さらには住宅・建築様式等との関係性を総合的に把握することで、近代京都の市街地形成を史的に整理・解明する。

文1) 京都市・財団法人京都市景観まちづくりセンター・立命館大学“平成20・21年度「京町家まちづくり調査」記録集”平成23年3月。

【研究成果の概要】

本研究は、京都の郊外住宅地がどのように市街地化されたのか、西陣地区西部の郊外住宅地区に加え、南区東九条周辺を取り上げた。26年度に確立した方法論を援用し、現地調査をこれに重ねつつ検討した。加えて、西陣地

区西部における戦前の区画整理地区における新型町家の建築類型の把握に努めた。関連して、戦前期における新聞広告を悉皆調査し、これらがどのように市場に流通したのか、を探った。

具体的には、京都市西部及び南部東九条地域を取り上げ、市街地の拡張過程を26年度に開拓した研究手法を援用しつつ明らかにした。具体的には、明治22年発行の仮製地形図（京都）から明治期の状況を復元的に検討した上で、明治中期以降の宅地化の状況を詳細に検討するために、地籍図（大正元年）や2種の京都市明細図（昭和初期・昭和20年代）を用いつつ土地利用の変遷過程を押さえ、さらに土地台帳から農地から宅地への「地目変換」の状況とその時期を特定しつつ地図に落とすことで、住宅地形成の過程を宅地の一筆単位で捕捉した。その際、立命館大学歴史都市防災研究センターにより作成されたGIS地図データを多用した。あわせて、現地調査による現存する住宅遺構の建築調査によりこれらの郊外住宅の建築類型を把握した。

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2015年度 共同研究成果報告書

B. 個別テーマ型 ④

近世近代期京都の地誌・案内記を対象とした デジタルアトラスの構築

研究代表者：塚本章宏 （徳島大学大学院総合科学研究部 准教授）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

矢野桂司（立命館大学文学部 教授）

赤間 亮（立命館大学文学部 教授）

金子貴昭（立命館大学衣笠総合研究機構 准教授）

山路正憲（立命館大学衣笠総合研究機構 研究員）

【研究課題の概要】

本研究課題は、近世から近代への移行期の京都における、あらゆる職種に関する人物・住所情報が記載された地誌・案内記類のデジタルアーカイブを進め、産業の立地や集積の地理的分布とその変遷を明らかにするためのデータ基盤の構築を目指すものである。これまでのデジタルアーカイブは、インターネットでの画像公開が主であったが、本研究課題では、地誌・案内記類の画像データベースと、地理情報システム（GIS）の管理・分析機能と連携させることで、オンライン上で主要産業のGIS地図と原資料を閲覧することができるデジタルアトラスを構築することを目指す。この成果によって、歴史学や地理学といった伝統的な研究分野のみならず、デジタル・ヒューマニティーズの研究基盤、研究事例としても期待される。

【研究成果の概要】

2015年度は、京都の地誌・案内記類の所蔵数で最大規模の一つである、京都府立総合資料館に所蔵された地誌・案内記類および近代期に出版された絵図について、デジタルアーカイブの成果を公開・整備を進め、インターネット上の画像データベースの閲覧とオンラインマップとの連携させたシステムの構築に取り組んだ。

公開した資料の点数は、2014年度から合わせて約116冊、撮影カット数では約10,000カットを数える。現在、アート・リサーチセンターのサーバーを利用して公開されている「京都地誌データベース」で閲覧が可能である。

上記の画像データベース構築・拡張についての作業を進めつつ、それらをインターネット地図から閲覧するための準備を進めた。本研究は、デジタルアトラスの構築を目指しており、様々な時間断面の商工業者・文化人の居住地

分布がわかる地図から、人物が掲載されているページの画像データへとリンクさせることが必要である。部、試験的に画像の詳細画面からオンライン地図へリンクを追加し、一方で、オンラインマップ上で示された京都の主要産業の地点から画像の詳細画面にリンクを追加した。こうした相互のリンクを作成することで、画像データベースとオンラインマップを相互に行き来できるような仕組みを構築した。今後、この仕組みが適用された画像データを増やしていくことが課題として挙げられる。

さらに、資料に記載された人物や住所情報のテキスト情報をまとめたファイルを用意することで、半自動的にこの仕組みに追加できるようにしていきたい。

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2015年度 共同研究成果報告書

B. 個別テーマ型 ⑤

東南アジアの舞踊のドキュメンテーションと デジタル・アーカイブ研究

研究代表者：中村美奈子（お茶の水女子大学 准教授）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

八村広三郎（立命館大学情報理工学部 特任教授）

Worawat Choensawat (Assistant professor, Bangkok University)

小島一成（神奈川工科大学 准教授）

安部直子 (France Postdoctoral Fellow, LAAS-CNRS in Toulouse)

宇津木安来（東京藝術大学大学院 博士後期課程）

木原 悠（お茶の水女子大学大学院 博士前期課程）

佐藤真知子（お茶の水女子大学大学院 博士後前期程）

【研究課題の概要】

本研究では、文化の視点から舞踊をとらえ、文理融合的アプローチから、東南アジアの民族舞踊を対象としたデジタル・アーカイブ構築モデルを提示する。従来の舞踊アーカイブでは、映像と舞踊のスコア（舞踊譜）を同時に保存するのが一般的であるが、本研究では、立命館大学ARCのモーションキャプチャシステムを用いて取得した舞踊の三次元動作データと同大学の多視点デジタル映像収録機器を用いた映像、さらに舞踊譜という、多様なデータを含む新しいタイプの舞踊アーカイブ構築を行う。ことを目的とする。

舞踊譜による記譜に関しては、同じく立命館大学で開発された舞踊譜ラバノーテーション (Labanotation) による記譜のためのシステムLaban Editorを、バリ舞踊の記譜と動作再現に適用できるように拡張する予定であったが、本年度は、行えなかった。また、研究代表者の体調不良により、本年度は、バリ舞踊を事例としたデジタル・アーカイブ構築モデルの提示にとどまった。

ARCにモーションキャプチャの最新の機材が導入されたら、再度、応募したいと考えている。

【研究成果の概要】

2015年9月の来日に合わせて、バリ舞踊のモーションキャプチャ計測、および、3方向同時撮影ビデオによるビデオ撮影の実験を行った。バリ舞踊の中でも、プバンチアンBebancianという、女性による男振りの舞踊の計測を中心に行った。モーションキャプチャ計測の概要は次のとおりである。撮影日時：2015年9月17日、場所：立命館大学アート・リサーチセンター多目的室、演技者：1.

Partini氏（インドネシア国立芸術大学デンパサール校 ISI Denpasar・元教授）2. 日本人バリ舞踊家（舞踊歴20年以上、バリ島在住）3. 佐藤真知子（バリ舞踊歴1年、お茶の水女子大学大学院生、プロジェクトメンバー）の3名である。

モーションキャプチャの撮影機材は、Motion Analysis Rapter-12 1200、カメラ台数16台、リファレンスカメラ4台を用いて、小島一成と神奈川工科大学のスタッフが行った。（神工大のモーションキャプチャシステムを用いた）。また、ARCの3方向同時撮影システムを用いて、拠点研究員の山路氏らの協力のもと、バリ舞踊の映像の撮影も合わせて行った。

ネイティブのバリ人によるモーションキャプチャの事例は少なく、データとしても貴重なものであると考える。高解像度な映像による記録とさらに、Labanotation（舞踊記譜法）による記録が加われば、より、密度の高いアーカイブの構築が可能であろう。研究への応用としては、今後、バリ人の踊り手に特有な重心移動や動きのタイミング（間）の取り方や体幹の動き、上肢の各関節の使い方の相互関係といった点について、日本人のそれとの比較なども行いながら、定量的に明らかにしたいと考えている。

また、モーションキャプチャによる手指動作との同時計測という高度なデータを取得できたため、バリ舞踊の手指の動きを含む複雑な上肢の動きの分析も可能になると考える。他の東南アジアの舞踊のデータ計測をすることができれば、東南アジアの舞踊の微妙な動きの違いやその要因もあきらかにできるのではないかと考える。



図1 手指のマーカ



図2 計測の様子（基本姿勢アグムagem）



図3 3方向同時撮影ビデオ

若手研究者（大学院生）が、メンバーとしてプロジェクトに積極的に参加してくれたことも成果のひとつである。

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2015年度 共同研究成果報告書

B. 個別テーマ型 ⑥

浮世絵技法の復元的研究のための 光計測・画像解析基盤技術の創出

研究代表者：南川丈夫（京都府立医科大学 助教）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

赤間 亮（立命館大学文学部 教授）

金子貴昭（立命館大学衣笠総合研究機構 准教授）

竹中健司（竹中木版竹筥堂 五代目摺師 代表取締役社長）

谷口一徹（立命館大学理工学部 講師）

永井大規（竹中木版竹筥堂 摺師）

【研究課題の概要】

浮世絵は、江戸時代に発展した多色摺木版画であり、現在では日本を代表する伝統美術として伝えられている。しかし、浮世絵の版木は、仮に現存する場合であっても、摺り工程による摩耗等により、木版の再現が不能なほど劣化している事が多い。また、浮世絵の伝統技法は主に直伝で受け継がれてきたため、浮世絵の製作手法や使用した材料が現在では不明であることが多い。そこで、本研究では、版木および版画を光計測・画像解析技術を駆使して科学的に分析することで、当時の浮世絵の製作手法や材料の再現による伝統技術の復元するための基盤技術の創出を目指す。本研究は、光計測、情報処理、木版研究、浮世絵研究の専門家と浮世絵職人の産学・文理融合型のチームで推進する。

【研究成果の概要】

本研究では、我々が確立したラマン散乱・自家蛍光分光法による色材分析法を用い、様々な版木・版画のラマン・自家蛍光分光スペクトルデータベースの作成、色材のラマン散乱分光イメージングへの展開、自家蛍光による彫摺技法復元法の検討を行った。

まず、昨年度までに確立したラマン散乱・自家蛍光分光法により江戸～昭和における木版画・版木の色材分析を行った。その結果、各版画・版木において特徴的なラマンスペクトルが得ることに成功した。また、これまでの研究で得られた基礎スペクトルデータベースと照合することで、分子同定を試みた。その結果、浮世絵に用いられてきた墨、黄鉛などの色材を同定することに成功した。

また、木版画における色材のラマン散乱分光イメージングへの展開を行った。特に、用紙繊維1本レベル（分解能～1μm）での高分解能ラマンイメージングを行い、各色材の付着の仕方、分布を分析した。その結果、混色摺刷部において、複数の色材が粒子状に分布している様子を撮像す

ることに成功した。また、ラマンスペクトル分析から、各粒子の分子同定も可能であることを示した。色材の種類、形状、大きさ、分布は、色材の製造技術、および木版の摺り技術を強く反映した情報であると考えられることから、ラマン散乱分光イメージングは、浮世絵製作技術を推察、およびデジタル・アーカイブ化する上で非常に有用であることを明らかにした。

さらに、自家蛍光分光法を用いた彫摺技法の推定も行った。自家蛍光観察法を用いることで、通常の画像観察では困難であった微細な色材分布が明瞭に観察できることを見出した。色材分布は、色材の粘度、摺り圧力・方向、摺刷方法（積層摺刷など）、版木の彫り方などを強く反映していると考えられる。即ち、自家蛍光観察法により、彫摺技法の一端を観察ができることが見出された

今後は、本研究で得られた成果を発展させ様々な版画・版木のデジタル・アーカイブ化を推進するとともに、さらなる浮世絵技法推定法の検討、および浮世絵技法の復元・継承・保存を行っていく。

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2015年度 共同研究成果報告書

B. 個別テーマ型 ⑦

演劇上演記録のデータ・ベース化と活用、 ならびに汎用利用システム構築に関する研究

研究代表者：武藤祥子（公益財団法人 松竹大谷図書館）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

井川繭子（松竹大谷図書館）

村島彩加（日本学術振興会 PD）

倉橋正恵（立命館大学衣笠研究機構 客員研究員）

青山いずみ（立命館大学文学研究科博士課程前期課程）

【研究課題の概要】

松竹大谷図書館は、開館以来、演劇史や演劇資料整理の基礎となる演劇上演記録を作成してきた。この上演記録は、主に明治初年から戦前までの東京の記録と、戦後の各地の大劇場、及び東京の小劇場の記録である。これらの上演記録は、元々カード式によって整理されていたもので、これをデータベースに移行しつつ、不完全な情報については、資料の原典に当たるなど精緻化、考証を進めてデータの精度を上げ、日本演劇の研究と資料整理の基礎となる上演記録データベースを構築する。

【研究成果の概要】

2015年度の研究では、昨年度に引き続き劇場ごとの演劇上演記録を、京都座、浅草松竹座、邦楽座、読売ホール、都市センターホール、前進座劇場の各劇場のデータについて考証を終了することができた。

それに加えて、ジャンルごとの考証作業として、各劇場で上演された舞踊会興行について上演記録の作成と考証作業を、戦後の昭和20年より昭和40年まで行った。入力作業にあたっては、松竹大谷図書館が「舞踊会筋書」として上演年順に合本保存している、これまで目録化されていなかった筋書（プログラム）を網羅的に入力した。データには上演年月、劇場、興行名（会名）、主催者などを入力し、舞踊会の記録を探す際によく利用される、会名や舞踊家名などのキーワードで検索ができるようにした。また、歌舞伎俳優が出演した舞踊会興行については、歌舞伎俳優の出演記録を作成する際の参考となるように、上演タイトル及び出演者も採用して入力した。歌舞伎の本興行で上演される舞踊作品の中には、舞踊会で初演された作品も多くあり、松竹大谷図書館では今後公演プログラムに掲載される作品ごとの上演年表を作成する際にも欠かせない重要な参考資料として活用している。

上記の考証作業は、昨年度より引き続き担当している、

演劇の専門知識を持った人材2名により入力作業が行われた。考証作業も2年目に入り継続して作業を行う中で、内容もより高度な考証を自主的に行えるようになって充実したデータが完成するなど、確実に成果が上がってきている。

また、2014年度研究で行った新派上演データベースの考証作業は、基となる入力データが完成し、公開データベースの構築作業を進めている。データ件数は、2,653件である。

さらに、別予算で進めている芝居番付のデジタル化はアート・リサーチセンターとのコラボレーションで引き続き進行中である。2015年中に画像化が完了し、目録データの入力考証作業を進めている。作業が完了したデータから順次公開中である。

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2015年度 共同研究成果報告書

B. 個別テーマ型 ⑧

富本憲吉とバーナード・リーチ往復書簡の研究 ——京都市立芸術大学所蔵資料を中心に

研究代表者：森野彰人（京都市立芸術大学美術学部 准教授）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

鈴木禎宏（お茶の水女子大学大学院 准教授）

Meghen Jones (Associate Professor, Alfred University)

永楽善五郎（京都市立芸術大学美術学部 特任教授）

松尾芳樹（京都市立芸術大学芸術資料館 学芸員）

彬子女王（京都産業大学日本文化研究所 専任研究員）

前崎信也（京都女子大学家政学部 准教授）

入澤聖明（アサヒビール大山崎山荘美術館 学芸員）

【研究課題の概要】

富本憲吉（1886－1963）は「色絵磁器」で第1回の重要無形文化財保持者に認定され、文化勲章を受章した陶芸家である。京都市立芸術大学の前身である京都市立美術大学において教授・学長も務め、20世紀を代表する多数の芸術家を育成したことで知られている。2013年、京都市立芸術大学は富本憲吉記念館（奈良県安堵町）から富本憲吉関連資料の寄贈（940件）をうけた。本研究では、同資料中の富本と英国人陶芸家バーナード・リーチ（1887-1979）の間で交わされた書簡のデジタル画像を用い、画像データベースを構築、それをもとに研究を行う。20世紀の日本と英国を代表する陶芸家のやりとりを翻刻・研究し、画像及び研究成果をデータベース上で公開することにより、日英の美術工芸史に新たな成果・手法を提示する。

【研究成果の概要】

本研究では、京都市立芸術大学所蔵の富本憲吉関連資料を中心に、撮影、文字資料の翻刻、英文資料の翻訳を進めてきた。2015年度は、データベースの内容の拡充を進め、2016年1月に、立命館大学アート・リサーチセンター、及び、京都市立芸術大学芸術資源研究センターのホームページ上で公開を行った。データベースの構築・公開の作業と並行して、本研究ではこれまでに、シンポジウム・研究会の開催、貴重資料の出版作業、未公開の富本憲吉関連資料の調査を行った。

2013年12月1日（日）、京都市立芸術大学主催のシンポ

ジウム『富本憲吉のことば』（会場：京都国立近代美術館講堂）を企画・開催。2015年2月13日（金）に京都市立芸術大学芸術資源研究センターにおいて、本研究プロジェクトのメンバー参加の研究会を行った。これらの研究・発表の成果として、『富本憲吉著 我が陶器造り』の出版に向けた作業を続けてきた。今年度は校正を進め、編集作業はほぼ終了した。2016年上半旬、森野彰人、前崎信也編『富本憲吉著 我が陶器造り』（里文出版）として刊行する。

本書出版に加えて、京都市立芸術大学所蔵富本憲吉関連資料に関する研究書を研究メンバーで2017年度内に出版することを予定している。そのため本年度は未撮影の作品の撮影、新資料の購入、石川県小松市立博物館に所蔵される富本憲吉旧蔵の可能性のあるスケッチブックの調査を行った。

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2015年度 共同研究成果報告書

B. 個別テーマ型 ⑨

Archiving and Utilization of Japanese Performing Arts Materials on GloPAD and JPARC

研究代表者：Katherine Saltzman-Li (Associate Professor, University of California at Santa Barbara)

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

赤間 亮（立命館大学文学部 教授）

Monica Bethe（中世日本研究所 所長）

Ann Ferguson（Special Collections Librarian, Seattle Public Library）

Beng Choo Lim（Associate Professor, National University of Singapore）

Diego Pellicchia（ARC Research Project Associate）

Nicolai Pesochinsky（Vice Rector and Professor, St. Petersburg State Theatre Arts Academy）

Joshua Young（Program Manager, Cornell University East Asia Program）

【研究課題の概要】

To develop the Global Performing Arts website, database (GloPAD), and Japan Resource Center (JPARC), we have aimed at a general overhaul and upgrading of the website. This involves 1) reorganizing the presentation of traditional performing arts on JPARC 2) building a system for enabling multi-lingual, multi-media interactive drama texts 3) launching teacher-student projects to develop portals; and 4) staging conferences with guest performers, videotaping parts, and then editing, subtitling and integrating these videos into web pages. Groundwork laid in 2014 was developed during 2015 through building a new GloPAC and JPARC site [not yet open to the public], activating a system for interactive texts, and editing videos, as well as holding conferences and JPARC related college classes.

【研究成果の概要】

Much of this year was focused on redesigning the website, which involves visual and functional revamping as well as overall reorganization of material and filling in missing areas. Separate teams at Cornell, Santa Barbara, Singapore and ARC worked in tandem to renew and revitalize the complex integration of database imagery and metadata with contextualized presentation on the JPARC site without losing previous capabilities. While the Cornell team has focused on functional implementation, the ARC team has tackled overall

reorganization and underlying concepts, the Santa Barbara team worked on activating student involvement, and the Singapore team continued to contribute content for modules. Building a new GloPAC/JPARC site with an updated content management system and moving over the edited and updated material in a systematic way requires large and small decisions as well as concurrence on fundamental goals, so we ended the fiscal year by a meeting at Cornell to thrash out these problems and lay the groundwork for effective implementation.

We have also continued to supplement the JPARC site by adding material where there seem to be gaps. We have supplemented a portal on Zeami with a portal for another noh playwright, Kanze Kojiro Nobumitsu, and are ready to upload various materials, including an interactive text of one of his plays, *Funa Benkei*. The development of a management system to support multi-media texts was the work of the ARC technicians and though still in progress is already functional. Videos and some of the photos to enhance the text were taken at ARC in a series of workshops involving performers discussing and demonstrating their arts.

The Kabuki portal is in need of ground revamping, and with that in mind Saltzman-Li conducted a 5 week class on Digital Humanities and Kabuki at University of California, Santa Barbara. This provided new perspectives and trained young academics, brining into focus the needs of students who are new to the subject and tapping their innovative approaches. They put their results on Scalar, an academic platform for publishing internet books.

During 2015, we held a number of workshops and conferences including academic presentations and lecture demonstrations by noh and kyogen performers. Attendance included professors and graduate students from other universities both local and distant, as well as interested community members. Audience interest in continued participation opened up avenues for future online cooperative projects with other Japanese universities. We are using the material recorded at the events to flesh out JPARC modules.

文部科学省 共同利用・共同研究拠点

立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点2015年度 共同研究成果報告書

B. 個別テーマ型 ⑩

中世語彙画像対照データベースの構築に関する基礎研究

研究代表者：楊 曉捷（カルガリー大学 教授）

【共同研究者（外部研究者・大学院生含む）】

赤間 亮（立命館大学文学部 教授）

【研究課題の概要】

デジタル環境の発達、歴史や文学などの分野における古典の研究に新たな可能性と、かつてない課題をもたらした。本研究は、絵巻解読や研究の基礎環境を整えること目指し、これまで存在しなかった内容や様式の情報を作成しようとする。とりわけ同じテーマをめぐる詞書と画像という異なる表現媒体を併せ持つ絵巻の構成に着目し、中世の語彙と画像との対照を明らかにし、デジタル環境を用いる縦横に検索するリソースを研究者や絵巻の読者に提供する。

【研究成果の概要】

中世の語彙への同時代の人々によるビジュアル的な解釈、中世文献にみる言葉と画像との両方の対応のあり方を探るための基礎的なアプローチとして、インターネット特設ページ「古典画像にみる生活百景」（<http://people.ucalgary.ca/~xyang/hp/hp.html>）を設計・作成し、公開した。現在オンラインで高精細デジタル画像で公開利用されている日本の古典画像から、あわせて37作品（11の所蔵機構）を対象に、百の場面を選択した。日々進化しているデジタルリソースの利用の可能性を模索するとともに、ひろく歴史や古典文学教育のための参考になり、広く古典画像への距離を減らすことに寄与しようとするものである。

2016年度 アート・リサーチセンター活動記録

開催日	イベント名
シンポジウム	
2016. 8.5(金) 14:00-18:00 8.6(土) 10:30-17:30 立命館大学 びわこ・くさつキャンパス コーニングハウスII C803	文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」・ 立命館大学研究拠点形成支援プログラム 研究成果発表・シンポジウム ARC Days 2016 [主催] 立命館大学アート・リサーチセンター、立命館大学情報理工学部、文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」
成果発表会	
2017. 2.17(金) 13:00-18:05 2.18(土) 10:00-17:25 ARC 多目的ルーム	文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」研究拠点・形成支援 プログラム研究プロジェクト 2016年度成果発表会 [主催] 立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ 研究拠点」、立命館大学研究拠点形成支援プログラム
ワークショップ	
2016. 6.4(土) 13:00-18:00 6.5(日) 9:00-16:00 ARC 会議室1・2	20世紀日本ファッション産業の仲介者たち [主催] 「糸・布・衣循環史研究会」(科研費補助金基盤B研究課題「糸・布・衣の価値化の世界史」)、立命館大学アート・リサ ーチセンター文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」研究課題 「デジタル・アー カイブ手法を用いた近代染織資料の整理と活用」、政治経済学・経済史学会「糸・布・衣の循環史」フォーラム
2016. 10.29(土) 13:00-18:00 10.30(日) 9:30-16:40 ARC 多目的ルーム	学術資料としての『型紙』—資料の共有化と活用に向けて [主催] 立命館大学 研究成果国際発信プログラム「国際的な型紙研究の基盤構築と活用に関する研究」、立命館大学アート・ リサーチセンター [共催] 立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ 研究拠点」 《デジタル・アーカイブ手法を用いた近代染織資料の整理と活用プロジェクト》
2016. 2.20(月) 13:30-17:00 2.21(火) 10:00-16:00 ARC 多目的ルーム	アジア圏文化資源研究開拓プロジェクト国際ワークショップ 東アジア演劇研究におけるデジタル・ヒューマニティーズの可能性 [主催] 立命館大学 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(日本文化資源のグローバルアクション)、立命館大学アートリサ ーチセンター アジア圏文化資源研究開拓プロジェクト [助成]一般財団法人 橋本循記念会
講演会	
2016. 1.13(金) 16:30-18:00 ARC 多目的ルーム	国芳『安達原一ツ家之図』を読み解く 講師：小松和彦 (国際日本文化研究センター 所長) [主催]立命館大学アート・リサーチセンター
セミナー	
2016. 4.27(水) 18:00-18:45 ARC 多目的ルーム	第27回 ARCセミナー “New Facts about Lockhart Collection” 講師：李 増先 (衣笠総合研究機構 PD)
2016. 5.25(水) 18:00-19:30 ARC 多目的ルーム	第28回 ARCセミナー ① “First Attempts at Finding Soseki's Kyoto: Methods, Problems, and Insights 漱石の京都を探す：第一歩で発見した方法と課題” 講師：Sarah Frederick (ボストン大学・准教授) ② “Dangerous Omens and the Soundscape of Heian Japan” 講師：Michael Como (衣笠総合研究機構 客員協力研究員)
2016. 6.22(水) 18:00-19:30 ARC 多目的ルーム	第29回 ARCセミナー ① 「DBを活用したゲームタイトルを対象とするマクロ的分析」 講師：福田一史 (衣笠総合研究機構 専門研究員) ② 「小さな文化遺産のデジタル文化資源化」 講師：山口欧志 (奈良文化財研究所 アソシエイトフェロー)

2016. 6.29(水) 18:00-19:30 ARC 多目的ルーム	第30回 [番外編] 国際ARCセミナー ① “Tsukioka Kogyo's Noh Prints” 講師：Katherine Saltzman-li 先生（カリフォルニア大学サンタバーバラ校） ② “Individuality in an Age of Reproduction: On the Actor's Image in Nineteenth-Century Japan” 講師：Jonathan Zwicker 先生（ミシガン大学 日本学研究センター所長）
2016. 7.20(水) 18:00-19:30 ARC 多目的ルーム	第31回 ARCセミナー ① “Character segmentation and transcription system for Japanese historical books” 講師：Panichkriangkrai Chulapong（立命館大学大学院 理工学研究科・D6） ② 「雑誌書評を用いた翻訳の受容研究－『忠臣蔵』翻訳を通じた読書環境へのアプローチ－」 講師：川内育子（立命館大学文学研究科文化情報学専修 D3）
2016. 10.14(金) 16:20-17:50 ARC 多目的ルーム	第32回 [番外編] 国際ARCセミナー “Swiss Textiles for Global Markets. Design processes in the Zurich silk industry, 1800 - 2000” 「世界市場向けスイス製繊維－チューリッヒ絹産業におけるデザインプロセス(1800年～2000年)」 講師：アレクシス・シュワルツェンバッハ先生（ルツェルン大学芸術デザイン学部 教授）
2016. 10.26(水) 18:00-19:30 ARC 多目的ルーム	第33回 ARCセミナー ① 「工芸の情報発信－Google Arts & Cultureを例に」 講師：山本真紗子（立命館大学 非常勤講師） ② 「映像資料のGISデータベースを活用した記憶アーカイブ －近代京都における山鉾町の暮らしと祇園祭－」 講師：佐藤弘隆（立命館大学文学研究科文化情報学専修 D2）
2016. 11.16(水) 18:00-19:30 ARC 多目的ルーム	第34回 ARCセミナー ① 「日本近代文学作品の〈装い〉アーカイブ －UC Berkeley所蔵・村上文庫の現状とデジタル化の意義－」 講師：常木佳奈（立命館大学文学研究科文化情報学専修 D1） ② “An Introduction to Maidstone Museum and Bently Art Gallery's Japanese Collection” 「メイドストーン博物館日本の芸術コレクションの紹介」 講師：Tothill Vanessa（立命館大学日本DH拠点 博士課程後期課程 D4）
2016. 11.23(水) 18:00-19:30 ARC 多目的ルーム	第35回 [番外編] 国際ARCセミナー “The Triumph of Calligraphy: presenting text in early modern Japanese printed books” 講師：エリス・ティニオス（リーズ大学名誉講師）
2016. 12.7(水) 18:00-19:30 ARC 多目的ルーム	第36回 [特別編] 国際ARCセミナー “Ukiyo-e and Kabuki theatre scenic design and painting” 講師：アレシア・カーボカ（Professor, School of Theatre & Dance, University of Montana）
2017. 1.18(水) 18:00-19:30 ARC 多目的ルーム	第38回 ARCセミナー ① “Identifying the Same Records in Different Languages while Searching Multiple Japanese Humanities Databases” 講師：Biligsai Khan Batjargal（立命館大学総合科学技術研究機構 専門研究員） ② 「JavaScript視覚化ライブラリの学術活用－分析／プレゼンテーションツールの開発事例－」 講師：斎藤進也（立命館大学映像学部映像学科 准教授）
展覧会	
2016.12.12(月)・26(月) 2017. 1.6(金)・20(金) 9:30-17:00 ARC 閲覧室	日本の伝説 異界展 ～人から鬼へ 鬼から人へ～ 【Web展示】 http://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/vm/jl2016/ 【主催】 立命館大学アート・リサーチセンター 【企画】 立命館大学日本文化情報学専攻 芸術ゼミ 【協力】 舞鶴市
2017. 2.22(水)・24(金)・26(日) 10:00-16:00 ひと・まち交流館京都 1F展示コーナー	古写真から見た昭和京都の生活～市電の音が聞こえる風景～ 【主催】 立命館大学アート・リサーチセンター、京都の鉄道・バスアーカイブ研究会 【共催】 立命館大学歴史都市防災研究所、特定非営利活動法人古材文化の会 【後援】 公益財団法人京都市景観・まちづくりセンター